

道徳的実践意欲を育てる道徳科の展開

— 相互評価を取り入れた振り返りの工夫を通して —

東広島市立小谷小学校 田川 恵子

研究の要約

本研究は、道徳科の授業において、児童の道徳的実践意欲を育てるために、相互評価を取り入れた振り返りの工夫を行うことの有効性について考察したものである。文献研究などから、児童の道徳的実践意欲を育てるためには、問題解決的な学習の終末において、相互評価を取り入れた未来志向の振り返りを行うことが必要であることが分かった。そこで、授業の終末において、これからの自分の課題や目標を見付け、自己決定する活動（見付けタイム）、有能感を高めるための相互評価を行う活動（高め合いタイム）、自分の課題や目標をもう一度見つめ直す活動（見つめタイム）の、三つの振り返り活動を行った。その結果、児童の道徳的実践意欲の育成につながった。このことから、相互評価を取り入れた未来志向の振り返りの工夫は、児童の道徳的実践意欲を育てることにつながることが分かった。

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別の教科道徳編（平成30年、以下「解説」とする。）第2節道徳科の目標には、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲（以下、道徳的実践意欲とする。）と態度を育てると示されている。この中の道徳的実践意欲について、「解説」には、道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働きであると定義されている。また、永田繁雄（2017）は道徳的実践意欲について、道徳的行為を「自分にもできそうだ」「やってみたいな」と感じる意欲であると述べている。このことから、道徳的実践意欲とはよりよく生きるために、道徳的価値を自分の生活に生かそうとする意欲であると捉える。

所属校の第6学年児童を対象とした道徳の時間に係る意識調査の肯定的回答率について、質問項目「道徳の時間の勉強はためになると思う」では92.1%、質問項目「道徳の時間で勉強したことを、自分の生活に生かしている」では65.7%であった。この結果から、道徳の授業に対する有効性を感じている児童の割合は高いが、授業での学びが道徳的実践につながっていると感じている児童の割合は低い

ことが分かった。これは、道徳的価値を自分の生活に生かそうとする意欲の不十分さが要因であると考えられる。

赤堀博行（平成26年）は、振り返りが道徳的価値の自覚を深め、よりよく生きようとする意欲につながると述べている。また、西野真由美（2016）は、学習で得られたものからこれからの目標を見付ける未来志向の振り返りが重要であると述べている。脇谷靖伸ら（平成30年）は、振り返りにおいて、学びを実践につなげるためには有能感を高めることが大切であると述べている。佐藤真（平成26年）は、子供同士による相互評価を行い、自己評価と相互評価との相違について理由や根拠を話し合うことで振り返りが充実すると述べている。

そこで本研究では、道徳的実践意欲を育てるために、終末で有能感を高める相互評価を取り入れた未来志向の振り返りを行う。まず、学習で得られたものから自分の生活に生かしたいことを書かせる。次に、グループ内での相互評価における肯定的評価やアドバイスなどにより有能感を高める。最後に、これからの目標を書かせ、未来の実践への意欲につなぐ。これらを通して、道徳的実践意欲を育てる道徳科の展開につながると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 道徳的実践意欲を育てる道徳科の展開

(1) 今、求められる道徳科の展開とは

今、求められる道徳科の展開について、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編（平成30年）は、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え向き合う、考え、議論する道徳への転換を図ることを示している。柳沼良太（2017）は、考え、議論する道徳により、実際の道徳的行為や習慣にもつながるような道徳授業を目指すことの必要性を述べている。また、押谷慶昭（2000）は、「道徳的実践意欲は道徳的価値を実現しようとする意欲、すなわちやる気であり意思の働きである。やる気がなければ気持ちがあっても、また、分かっているでも行為にはつながらない。」¹⁾と述べている。さらに、前述のように、道徳的実践意欲とはよりよく生きるために、道徳的価値を自分の生活に生かそうとする意欲であることから、実際の道徳的行為や習慣につながるためには道徳的実践意欲を育てることが必要であると考ええる。

これらのことから、今、求められている道徳科の展開とは、考え、議論する道徳において、実際の道徳的行為や習慣につながるための道徳的実践意欲を育てる授業を行うことであると考ええる。

(2) 道徳的実践意欲を育てる道徳科の展開とは

児童が道徳的価値を自分の生活に生かそうとする意欲をもつための指導として、「解説」は、考え、議論する道徳に向けて求められる質の高い三つの指導方法を取り入れた授業を行うことの必要性を示している。この中の問題解決的な学習について、「解説」は、ねらいとする道徳的価値を実現するための問題を見付けたり、物事を多面的・多角的に考えながら問題解決に向けて話し合ったりするなどの活動を通して、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題を培う学習であると示している。柳沼（2016）は、問題解決的な学習において、道徳的な問題解決能力を育成することにより、よりよく生きるための道徳性を高め、日常生活に汎用できるようになると述べている。また、広島県教育資料（平成30年）は、理解した道徳的価値を日常生活の行動や生活に結び付けていくための振り返りの必要性を挙げている。

以上のことから、本研究において、道徳的実践意欲を育てる道徳科の展開とは、導入においてねらいとする道徳的価値を実現するための問題を見付けたり、展開において物事を多面的・多角的に考えながら問題解決に向けて話し合ったりする活動など、問

題解決的な学習を行う中で、終末において振り返りを充実させていく展開であると捉える。

2 道徳的実践意欲を育てる道徳科の展開における相互評価を取り入れた振り返りの工夫

(1) 本研究の道徳科における振り返りとは

道徳科における振り返りについて、「解説」は、理解した道徳的価値から自分の生活を振り返り、自らの成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることの必要性を示している。また、西野真由美（2016）は、授業での振り返りは、学習で得られたものから、これからの自分の課題や目標を見付けること、つまり、未来志向の振り返りである、と述べている。

これらのことから、本研究の道徳科における振り返りとは、理解した道徳的価値から、これからの自分の課題や目標を見付ける活動を取り入れた、未来志向の振り返りを行うことであると考ええる。

(2) 道徳的実践意欲を育てる未来志向の振り返りとは

では、道徳的実践意欲を育てる未来志向の振り返りとは、どのようなものなのだろうか。

外山美樹（2011）は、子供の意欲的な行動を促すために、自ら好んで自己決定したいという自律性の欲求、行動をやり遂げる自信をもちたいという有能感の欲求を充足させることが重要であると述べている。また、この有能感について、外山（2011）は、人間は有能感を高めることで、次なる行動へ向かう意欲をもち続けることにつながると述べている。植田和也（2017）は、道徳科の授業の振り返りにおいて、児童同士が学んだ内容などについての考えを相互評価する活動を行うことで、有能感や自信、自尊感情の育成にもつながると述べている。

これらのことから、道徳的実践意欲を育てる未来志向の振り返りとは、理解した道徳的価値から、これからの自分の課題や目標を見付ける活動に加え、自己決定した内容を相互評価し、有能感を高める活動を取り入れた振り返りを行うことであると考ええる。

(3) 道徳的実践意欲を育てるための相互評価を取り入れた未来志向の振り返りの工夫

前述のように、道徳的実践意欲を育てる未来志向の振り返りとは、理解した道徳的価値から、これからの自分の課題や目標を見付ける活動に加え、自己決定した内容を他者と交流し、有能感を高める相互評価を行うことであると考えた。さらに、西野（2016）

は道徳科の授業において、考え、議論しながら最後は自分自身に向き合うことが、道徳科で育てたい「自律」につながると述べている。

これらのことから、道徳的実践意欲を育てるための相互評価を取り入れた未来志向の振り返りの工夫として、授業の終末において三つの活動を行う。次に、それぞれの活動の詳細について説明する。

ア これからの自分の課題や目標を見付け、自己決定する活動：1人で「見付けタイム」

本活動では、展開後半において、理解した道徳的価値から獲得した、児童一人一人が納得でき、周囲の納得も得られる解（以下、納得解とする。）を基に、これからの課題や目標を具体的に考え、自己決定した内容を記入させる。この活動により、児童が納得解をより一層自分との関わりで捉えることができると思う。

イ 有能感を高めるための相互評価を行う活動：3人で「高め合いタイム」

① 有能感を高めるためには

有能感について、西口利文（2013）は、自分は目の前の課題をうまくこなすことができるという感覚であると述べている。アルバート・バンデューラ（1997）は、自己効力感について、自分は予測される状況を管理するのに必要な行動を計画したり、実行したりすることができると思えることと定義している。このことから、有能感と自己効力感は、いずれもやればできると自分を信じるという点において共通していると考え、この二つの用語を本研究では有能感にまとめて示すこととし、有能感とは、自分は目の前の課題をすることができると思えることであるとする。

表1 有能感を高めるための四つの要素

要素	説明	留意点
直接的達成経験	自分でチャレンジをして達成と成功の体験を積み重ねること。	できるだけ小さな目標を設定する。
代理的経験	他の人の行動を観察することで「自分にもできる」という信念を生み出すこと。	自分とはかけ離れた人や失敗した人の行動を観察しない。
言語的説得	人から自分に能力があると指摘され、「君ならできる」と繰り返し励まされること。	非現実的な励ましをせず、子供の状態に適した言葉掛けをする。
生理的・情動的喚起	心身の状態が良いことや前向きな気分のこと。	同じコンディションであっても、それをどう理解するかによって意欲が変化するため、気持ちが前向きになる場を設定する。

バンデューラ（1997）が提唱した有能感を高める四つの要素について、佐藤純（2013）、久世浩司（2015）、広島県教育委員会（平成26年）の理論を基に、稿者が表1に整理する⁽¹⁾。

また、西口（2013）は、子供の有能感を高めるためには、自らの能力を客観的に把握し、それを基に現実的な目標に向けて活動することができるようにすることの必要性を述べている。

これらのことから、有能感を高めるためには、有能感を高めるための四つの要素を児童が意識できるようにするとともに、自らの能力を客観的に把握できるような相互評価の機会を指導者が設定する必要があると考える。

② 有能感を高めるための相互評価

では、有能感を高めるための相互評価は、どのようにすればよいのだろうか。

水上勝義（2017）は、有能感を高めるコミュニケーションの方法として、アサーションを挙げている。平木典子（2015）は、アサーションについて、自分も相手も大切に自己表現であると述べている。埼玉県立総合教育センター（平成23年）は、話合いの場面で活用することができる、アサーションの考えに基づいた表現方法であるDESC法を紹介している。この表現方法について整理したものを表2に示す⁽²⁾。

表2 DESC法について

方法		説明	留意点
D	Describe (描写する)	自分に対応しようとする状況や相手の行動を客観的・具体的に描写する。	自分の主観を交えないようにする。
E	Express (表現する) Explain (説明する) Empathize (共感する)	状況や相手の行動に対する自分の主観的な気持ちを表現したり説明したりする。または、相手の気持ちに共感する。	特定の事項に対する自分の感じていることを建設的・冷静に表現する。
S	Specify (特定の提案をする)	相手に望む行動、妥協案、解決策などを具体的に提案する。	現実的なものになるよう注意する。提案には相手が常に賛成してくれるとは限らないことを覚悟して提案する。
C	Choose (選択する)	提案に対する肯定的・否定的結果を想像し、その結果に対する選択肢を示す。	

また、DESC法だけではなく、非言語表現もコ

コミュニケーションの有効な手段であるとし、視覚的なもの（視線、姿勢、表情など）と聴覚的なもの（声の大きさ、速度、調子など）と表2の方法が一致して初めて有効な表現になると述べている。これらの考えを踏まえ、有能感を高めるための要素を取り入れた相互評価の視点と児童によるDESC法を取り入れた言葉掛けなどの例を、表3のように整理する⁽³⁾。なお、児童が話し合いを行う際には、児童が活用しやすいように、表3の言葉掛けを児童用シートとして作成したものをグループごとに配付する。

以上のことから、有能感を高めるための相互評価では、有能感を高める四つの要素を取り入れた視点を基に、児童がDESC法を活用した言葉掛けなどを行うことであると考ええる。

表3 有能感を高めるための要素を取り入れた相互評価の視点と児童によるDESC法を取り入れた言葉掛けなどの例

有能感を高めるための要素	相互評価の視点	DESC法を取り入れた言葉掛けなどの例
直接的達成経験	<ul style="list-style-type: none"> ・明日から、すぐに実行できそうな目標か。 ・相手の能力に応じた目標か。 ・相手の能力に応じた目標にするためにどうすればいいか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「～した方が、すぐに取り組めるんじゃないかな。」【S】 ・「～が難しければ、△という方法もあるけれど、どうかな。」【S】【C】
代理的経験	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が同じような経験をし、成功したことがあるか。 ・相手と能力的に差異がない他の人で、同じような経験をし、成功したことを見たり聞いたりしたことはあるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分も同じ経験があるよ。(△△くんがやっているのを見たよ。)」【D】だから、あなたもできるよ。」【E】
言語的説得	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の意見を肯定的に受け止めているか。 ・相手の状況に応じた適切な言葉掛けか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇くんは、～を頑張りたいんだね。」【D】 ・「〇〇くんの考えは、とてもいいね。」【E】 ・「〇〇くんの考えは、自分も真似したいな。」【E】
生理的・情動的喚起	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き方や話し方は、相手にとって気持ちのよいものになっているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目を見て ・うなずきながら

※表中の【D】等はそれぞれ表2の方法を示している。

③ 高め合いタイムについて

細川太輔（2016）は、3人のグループでの学び合いのよさとして、司会がいなくても全員が話し合いに参加できるので、一人一人が充実した言語活動を行うことができ、深く学び合うことに向いている点を挙げている。したがって、本活動では、3人1組で

のグループによる活動を行う。見付けタイムにおいて自己決定した内容を基に、一人ずつ説明を行う。坂本哲彦（2014）は、思考を視覚化するための方法の一つとして、一次元グラフ（以下、道徳スケールとする。）を挙げている。坂本（2014）は、道徳スケールの活用により、互いの判断の差異が明確になるため、話し合いが活性化されると述べている。

このことから、本活動において、図1のような道徳スケールを活用することとする。

道徳スケールにおける判断基準として、実際の道徳的行為や習慣に向け

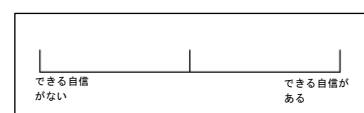


図1 相互評価で活用する道徳スケール

た自信の有無を設定する。このことで、実際の道徳的行為や習慣に向けた思いを話したり聞いたりする必然性が生まれ、より深く考えたり本音で話し合ったりすることが可能になると考える。自己決定した内容を説明する際には、道徳スケールのどのあたりに内容を位置付ければよいか考え、その理由も話すようにする。他の2人は、表3の視点や言葉掛けなどに留意しながら、肯定的評価やアドバイスなどを行う。なお、交流する際のグループ構成は、表1で示した生理的・情動的喚起の要素を踏まえ、人間関係を考慮したグループを構成する。

ウ 自分の課題や目標をもう一度見つめ直す活動：1人で「見つめタイム」

本活動では、納得解や高め合いタイムにおいて獲得した多様な考えを基に、自分自身と向き合いながら、今後の自分の生活の中で生かしたいことと、その時に大切な気持ちを考え、自己決定させる。この活動により、これからの自分の課題や目標が更に明確になるとともに、学びを未来につなごうとする意欲が高まると考える。

以上のことから、本研究では、児童の道徳的実践意欲を育てるために、問題解決的な学習の終末において、相互評価を取り入れた未来志向の振り返りの工夫を行う。このことを研究構想図にまとめ、次頁図2に示す。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

道徳科の授業において、問題解決的な学習の終末で、相互評価を取り入れた未来志向の振り返りの工夫を行えば、道徳的実践意欲を育てることができる

であろう。

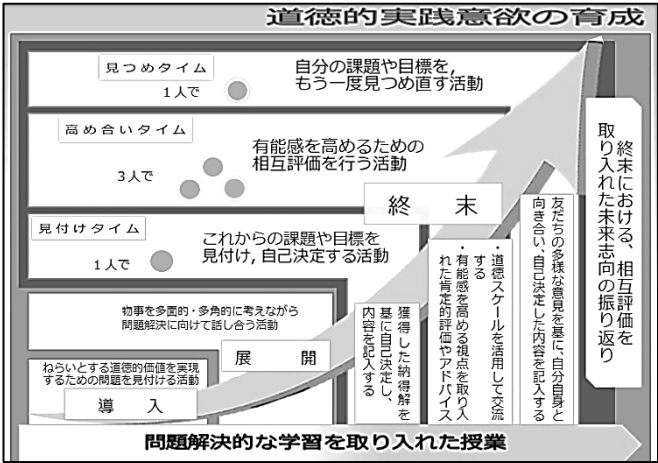


図2 研究構想図

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表4に示す。

表4 検証の視点と方法

検証の視点		方法
相互評価を取り入れた未来志向の振り返りの工夫により、道徳的実践意欲を育てることができたか。	学級集団としての変容	・アンケート ・自己評価シート ・振り返り活動についての感想
	個の変容	・付箋紙 ・ワークシート ・授業記録 ・自己評価シート ・アンケート

IV 検証授業について

1 検証授業の内容

- 期 間 平成30年6月27日～平成30年7月12日
- 対 象 所属校第6学年（1学級39人）

2 検証授業の概要

道徳の授業において、ねらいとする道徳的価値と児童の生活をつなげることにより、考えが広がりやすい【A（5）希望と勇気、努力と強い意志】【B（9）礼儀】【C（15）家族愛、家庭生活の充実】の検証授業を3単位時間実施した。道徳の授業の概要は次頁表5に示す。

V 検証授業の分析と考察

相互評価を取り入れた未来志向の振り返りの工夫により、道徳的実践意欲を育てることができたかについて検証する。

1 学級集団としての変容

(1) 検証授業前後のアンケート結果について

検証授業前後におけるアンケート調査の結果を図3に示す。

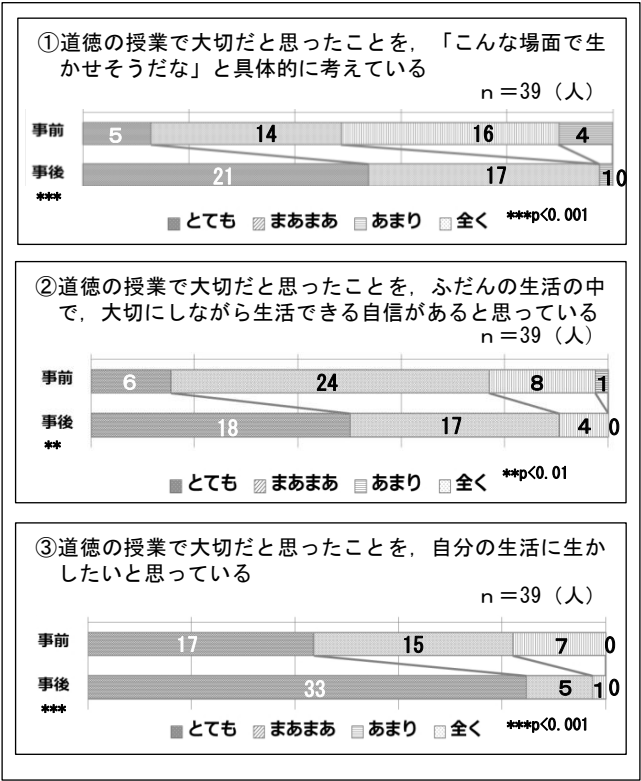


図3 検証授業前後の児童アンケート調査の結果

三つのアンケート項目の全てにおいて、「とても思う」「まあまあ思う」の肯定的な回答が増加していた。この理由として、納得解を基に、自分の課題や目標を考える時間を確保したことが、自分の生活にどのように生かすか具体的にイメージできることにつながったこと、その内容を相互評価することにより有能感が高まったことが児童の道徳的実践意欲の高まりにつながったと考える。一方、道徳的実践意欲に関するアンケート項目③について、「あまり思わない」と回答した児童1人については、アンケート項目①、②について、いずれも否定的な回答をしていた。この児童については、三つの振り返り活動についての感想に、「話合いで、他の人の案も取り入れることができたので楽しかった。」と記述していた。このことから、相互評価において自分の考えが広がることに意義を感じているものの、その考えに対して具体的な場面をイメージできなかったり、有能感を感じるができなかったりしたことが、道徳的実践意欲の高まりにつながらなかった要因であると考えられる。

表5 検証授業の概要

		検証授業1	検証授業2	検証授業3
月日 主題名 内容項目		平成30年6月27日 相手を尊重する心 B (9) 礼儀	平成30年7月4日 家族の絆 C (15) 家族愛、家庭生活の充実	平成30年7月12日 困難に打ちかつ力 A (5) 希望と勇気、努力と強い意志
ねらい 教材名【出典】		ホテルの従業員として働く主人公が、接客を通して感じた心づくしの違いについて話し合うことを通して、礼儀は社会生活を営む上で欠かせないものであることに気付く、相手の気持ちを考えることの大切さ、適切な言動をしようとする実践意欲を育てる。 「心づくしの風」【学研】	漁に出かけた父親に会うために坂道を下る主人公の気持ちを考えることを通して、愛情をもって育ててくれている家族の思いに気付く、感謝の気持ちをもって、幸せな家庭を築くために自分ができることを考え、実行しようとする実践意欲を育てる。 「はじめてのアンカー」【学研】	来場者の減少に伴った廃園の危機において、動物園存続に向けての多様な考えや開園当初からの願いを貫き通した主人公の思いについて話し合うことを通して、より高い目標をもつことの大切さに気付くとともに、くじけずに希望をもってやりぬこうとする実践意欲を育てる。 「市民に愛される動物園を目指して」【学研】
導入 5分 展開 30分 終 見付け タイム 高め合い タイム 見つけ タイム 10分	問題解決的な学習	1 児童が書いた感想を基にめあてを決める。 ○これまで知り合いでもないお店の人に、女の子のような言動をしたことがありますか。 <div>相手の心に南風をおくるために、どんな気持ちが必要なのだろうか。</div>	1 児童が書いた感想を基にめあてを決める。 ○これまで主人公のように、家族に対して嫌な気持ちになったり、けんかをしたりしましたか。 <div>家族みんなが仲良く、幸せに生活していくために、どんな気持ちが必要なのだろうか。</div>	1 児童が書いた感想を基にめあてを決める。 ○これまでに、困難があっても諦めず、頑張ったことがありますか。 <div>困難があっても諦めず、頑張るために、どんな気持ちが必要なのだろうか。</div>
		2 教材を読み、話し合う。 ○男の子と女の子の言動は、どこが違うのでしょうか。 ○男の子と女の子が、そのような行動をしたのはなぜでしょうか。 ○知らない相手にも南風を送る必要があるのでしょうか。また、それはなぜですか。 ○相手の心に南風をおくるためには、どんな気持ちが必要なのでしょうか。	2 教材を読み、話し合う。 ○Vサインを出したとき、主人公はどんな気持ちだったのでしょうか。 ○黙ってうとうとしている主人公は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ○主人公はお父さんにどんな気持ちを伝えたいと思いますか。 ○家族みんなが仲良く、幸せに暮らしていくために、どんな気持ちが必要なのでしょうか。	2 教材を読み、話し合う。 ○このお話に出てくる「困難」とは何ですか。 ○あなたが主人公なら、どうしたいと思いますか。また、それはなぜですか。 ○廃園の危機に関わらず、主人公がガイドを再開したのはなぜでしょうか。 ○困難があっても諦めず、頑張るためには、どんな気持ちが必要なのでしょうか。
		3 振り返る。 ○自分のこれからの生活の中で、今日の学習を通して大切だと思ったことを、どんな場面で生かしたいか書きましょう。 ○書いた内容について、道徳スケールを使ってグループで話し合いましょう。 ○高め合いタイムでの話し合いを踏まえて、自分のこれからの生活の中で生かしていきたいことを考えて書きましょう。また、そのためにどんな気持ちが必要か書きましょう。	3 振り返る。 ○自分のこれからの生活の中で、今日の学習を通して大切だと思ったことを、どんな場面で生かしたいか書きましょう。 ○書いた内容について、道徳スケールを使ってグループで話し合いましょう。 ○高め合いタイムでの話し合いを踏まえて、自分のこれからの生活の中で生かしていきたいことを考えて書きましょう。また、そのためにどんな気持ちが必要か書きましょう。	3 振り返る。 ○自分のこれからの生活の中で、今日の学習を通して大切だと思ったことを、どんな場面で生かしたいか書きましょう。 ○書いた内容について、道徳スケールを使ってグループで話し合いましょう。 ○高め合いタイムでの話し合いを踏まえて、自分のこれからの生活の中で生かしていきたいことを考えて書きましょう。また、そのためにどんな気持ちが必要か書きましょう。

(2) 自己評価シートについて

各検証授業後に、児童が授業において道徳的实践意欲をもてたと実感した段階を選択する自己評価を行った。前頁に示した図3のアンケート項目③の結果から、検証授業後に道徳的实践意欲が高まったと考えられる児童38人の自己評価結果を集約し、その割合を図4にまとめた。

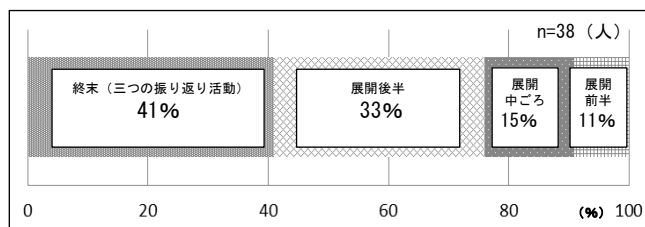


図4 各検証授業後に児童が道徳的实践意欲をもてたと実感した段階の割合

この中で、終末（三つの振り返り活動）を選んだ児童の理由には、「（道徳の授業で理解した）大切な気持ちを、これからの自分の生活に生かすことに

ついてしっかり考えることができたから。」「友だちにアドバイスやはげましをもらえて、自信がついたから。」などの記述があった。このことから、展開後半において獲得した納得解を基に、これからの課題や目標を具体的に考えることができたことや、有能感を高める相互評価を行ったことに対して肯定的に受け止めていると言える。一方、終末（三つの振り返り活動）以外を選んでいる児童は、「登場人物の行動が、普段の自分の行動に似ていると感じたから。」「これから家族と仲良く過ごすための大切な気持ちについて（話し合いを通して）知ることができたから。」などと記述していた。これらから、終末における振り返りの工夫だけでなく、問題解決的な学習の展開において、多面的・多角的に考える活動を行うことは、道徳的实践意欲の高まりにつながるために必要であると考えられる。

(3) 三つの振り返り活動の感想について

検証授業後に、三つの振り返り活動についての感想を記入させた。その感想の一部を次に示す。

- ・友だちと意見を交換することで自信がついたから、今までの振り返りの時よりもこれからの生活に生かしたいという気持ちが強くなった。
- ・意見を出し合うと、(友だちの意見に対して)「これも自分にできそうだな」と思った。
- ・普段の生活で生かしたいことを考えられたし、行動に移す自信がとてついった。
- ・友だちの意見は良い点が多くてすごいと思い、私もがんばりたいと思った。
- ・自分の考えを友だちにしっかり伝えることができる時間が増えたと感じた。そうすることによって、自分の生活に生かしたり、自分の生活と関連付けたりして話しやすくなった。振り返りの大切さを改めて感じた。

※下線部は稿者による。

三つの振り返り活動についての感想の一部

他の児童についても、これからの自分の課題や目標を見付け、自己決定した内容を友だちと交流することで有能感をもつことができたことや、高め合いタイムで獲得した考えを基に、再度自分自身と向き合い、自己決定する時間をもつことができたことについて、肯定的に受け止めていた。これらのことから、三つの振り返り活動は、児童の道徳的実践意欲を高めるために有効であったと考える。しかし、1人の児童について、道徳的実践意欲は高まったが、「高め合いタイムは、グループの人に自分の思いを伝えづらかった。」と記述していた。この理由として、高め合いタイムでは、DESC法を活用した言葉掛けの例を基に、友だちの考えに対して言葉掛けを行うことはできていたが、自分が自己決定した内容を、どのように伝えてよいのか分からなかったり、自分の考えに自信をもつことができなかったりしたことが要因であると考え。一人一人の実態を十分に把握し、つまづきを予想しながら個に応じた手立てを講じる必要があったと考える。

2 個の変容

ここでは、検証授業2について取り上げる。道徳的実践意欲に関するアンケート項目の回答が、肯定的回答になった児童2人(A児, D児)を抽出し、三つの振り返り活動での様子などから検証を行う。

(1) 見付けタイムでの様子

展開後半においての納得解を基に、これからの生活で生かしたいことを具体的に考え、内容を付箋紙に記入した。児童が記入した内容を右上に示す。

この記述から、児童がねらいとする道徳的価値を理解し、自分との関わりで考えながら、これからの課題や目標を見付け、自己決定することができてい

たことが分かる。

- A児) お父さんやお母さんが働いていることを当たり前だと思わないこと。
D児) 家事で自分にできるようなことは自分であることを心掛ける。

見付けタイムにおける児童の記述内容

(2) 高め合いタイムでの様子

3人1グループで、道徳スケールを用い、DESC法を活用した相互評価を行ったところ、次のような話合いが行われた。A児, D児それぞれのグループにおける話合いの内容の一部を次に示す。

- A児) (付箋を「できる自信がない」に貼って) ここにした理由は、お手伝いをしたら100円もらっていて、私もお金は欲しいけど、それを当たり前と思わないようにしたいです。
B児) じゃあ、お金のことは忘れて、いっぱいお手伝いしたらいいと思います。【S】
C児) 私も、お風呂掃除をしたらお金をもらっていたけど、いつの間にかお金をもらうのを忘れていたから【D】、Bさんが言ったみたいに、ふつうに日常的に(お手伝いを)やればいいと思います。【S】

※下線部はDESC法を取り入れたもの

A児のグループにおける授業記録の一部

A児はこの話合いの後、付箋紙を「できる自信がある」の方へ動かしていた。これは、他の児童が【D】や【S】の視点を取り入れたアドバイスをを行ったことで、有能感が高まったことが要因であると考え。

- E児) (「できる自信がある」の位置に付箋を貼っていたD児の考えに対して) Dくんは、人の気持ちを考えて生活することができるので【D】、やることを自分で見つけてたくさんお手伝いができると思います。【E】
F児) (Dくんは) 自分にできることを見付けることができるので【D】、できると思います。【E】
D児) ありがとうございます。
F児) 私は、家族に約束をやぶられても、素直に接することです。
D児) 素直な気持ちは大切だと思うよ。【E】
E児) Fさんは、どんな時に素直な気持ちになる？
F児) お父さんが旅行に行こうと言っていたけどキャンセルになった時に嫌な気持ちになるけど、一回考え直して素直な気持ちになる。
D児) 素直な気持ちは大切だけど・・・約束を破るのは人間的にだめだと思う。
E児) 約束を破るってことは・・・人間は、そんなにきっちりしたものじゃないんだから・・・。
D児) 家族同士で気持ちを理解し合うためにも、嫌だという気持ちはちゃんと伝え方がいいと思う。【S】

※下線部はDESC法を取り入れたもの

D児のグループにおける授業記録の一部

D児は、最初から自分の考えに対して高い有能感をもつことができていたので、他の児童はその考えに対して、【D】や【E】の視点での肯定的評価を行っていた。その後、D児はF児の意見に対して【E】

の視点での肯定的評価を行っていたが、D児から詳しい話を聞いているうち、自分の考えとの違いに気付く、【S】の視点を取り入れたアドバイスをを行った。F児のワークシートの記述から、F児はD児からのアドバイスに対し理解を示していることが分かったが、結果的に有能感が高まらず、付箋紙は動かなかった。D児のアドバイスの内容が、自分にはできそうにないと感じたことが要因であると考え

(3) 見つめタイムでの様子

高め合いタイムでの話合いを踏まえ、自己決定した内容と大切にしたい気持ちをワークシートに記入させた。それぞれの児童の記述を次に示す。

- A児) 「お金! お金! 」と言わずに、いっぱい働いて、「これやって」と言われたらスツとできるようになる。家族に対して「ありがとう」という気持ちをもつ。
D児) 自分にとっていやなことがあっても、それはしかたがないことかもしれないから、素直になることも大切だということ。相手の気持ちを考えることを心掛ける。

見つめタイムにおける児童の記述内容

いずれの児童も、高め合いタイムでの話合いを基に、未来志向の振り返りを行うことができていた。さらに、児童の記述内容が、見付けタイムで付箋紙に書いたものと異なる内容になっていた。A児については、自分や家族が普段話している内容を書いていることから、自己決定した内容がより具体的になったことが分かる。高め合いタイムにおいて、友だちからももらったアドバイスが自分の経験に基づいたものであったことから、具体的な行動をイメージしやすかったのではないかと考える。D児は、高め合いタイムにおいて、F児の考えを取り入れたものを記述していた。自分がもっていなかった新しい考えに触れて、考えが広がったことが要因であると考え

検証授業後、自己評価シートを用い、児童が道徳的实践意欲をもてたと実感した段階及びその理由等を調査した。その内容について表6に示す。

表6 児童が道徳的实践意欲をもてたと実感した段階を見る自己評価シートの記述内容

	選んだ段階	理由	生かしたいこと
A児	高め合いタイム	自分には難しいと思った時、友だちが励ましてくれた。	お互いを思いやる気持ちをもつ。
D児	見つめタイム	具体的な行動を考えることができた。	お互い素直な気持ちをもつ。

これらの記述から、DESC法を活用した友だちからの言葉掛けの内容や、これからの自分について具体的に考える時間がもてたことについて児童が肯定的に受け止めていることが分かる。

以上の検証の結果から、三つの振り返り活動は、児童の道徳的实践意欲を育てることにつながったと考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

道徳科の授業において、問題解決的な学習の終末で、相互評価を取り入れた未来志向の振り返りの工夫を行えば、道徳的实践意欲を育てることにつながることが分かった。

2 研究の課題

- 振り返り活動の内容やワークシートは、学年の発達の段階を考慮し、話合いの形態を工夫するなど、より汎用性があるものにしていく必要がある。
- 児童の高まった道徳的实践意欲を日常生活に生かしていくことができるよう、家庭や地域社会との連携を踏まえたカリキュラム・マネジメントに基づく道徳教育を推進していきたい。

【注】

- (1) 佐藤純 (2013) : 「自己効力感」『児童心理1月号』金子書房pp. 64-67, 久世浩司 (2015) : 『マンガでやさしくわかるレジリエンス』日本能率協会マネジメントセンターpp. 191-206, 広島県教育委員会 (平成26年) : 『児童生徒の心の回復力を育成する指導の在り方について』pp. 5-6を参考にして稿者が整理した。
- (2) 埼玉県立総合教育センター (平成23年) : 『よりよい人間関係をはぐくむ「アサーション・トレーニング」指導プログラムの開発に関する調査研究』p. 20を参考にして稿者が整理した。
- (3) 佐藤純 (2013) : 「自己効力感」『児童心理1月号』金子書房pp. 64-67, 久世浩司 (2015) : 『マンガでやさしくわかるレジリエンス』日本能率協会マネジメントセンターpp. 191-206, 埼玉県立総合教育センター (平成23年) : 『よりよい人間関係をはぐくむ「アサーション・トレーニング」指導プログラムの開発に関する調査研究』p. 20を参考にして稿者が整理した。

【引用文献】

- 1) 押谷慶昭 (2000) : 『道徳・特別活動重要用語300の基礎知識』明治図書p. 69

【参考文献】

- 文部科学省 (平成30年) : 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説特別の教科道徳編』廣済堂あかつき
西野真由美 (2016) : 『特別の教科道徳Q&A』ミネルヴァ書房
外山美樹 (2011) : 『行動を起こし、持続する力 モチベーションの心理学』新曜社